

職員リレーエッセイ

＜「ヴェニスに死す」からの文化数珠つなぎ＞

ニコニコホーム サービス管理責任者 後藤 たき

私は映画を見ることが 10 代のころからの趣味で、いまだに続いています。今までに見た映画でこれが一番！と一つに絞るのはとても難しく、自分の価値観が変わるほどの良い作品にたくさん出会ってきました。その中の一つに 30 代の半ばに見た「ヴェニスに死す」が私の映画好きを強固なものにし、自分の趣味を更に広げるきっかけになりました。監督はルキノ・ヴィスコンティ、原作はドイツの作家、トーマス・マンの同名小説です。

主人公の作曲家が旅先で大変見目麗しい美少年に出会い、心奪われ、奇行に走り、最後はコレラに感染して醜く一人ぼっちで死んでいくというなんとも物悲しく退廃的な、それでいて美しく、さすがヴィスコンティー！という映画です。

この作品をきっかけに新たな世界が広がっていったのです。

一つは、ヴィスコンティの監督する映画がとても好きになり、この後から「若者のすべて」「山猫」など素晴らしい作品を見続けていくこととなります。

二つ目は、映画の原作であるトーマス・マンに興味を湧き、小説「ヴェニスに死す」を読みました。原作の主人公の職業は小説家なのですが、本来モデルとなったのは、マンと親交のあった作曲家のマーラーであり、映画化された主人公の方がモデルそのままにマーラーであることを強調されていることがわかり、非常に興味深く嬉しい発見でした。

更にマンは性別など関係なく、“美”ということに大変こだわるのですが、その価値観に一生縛られ、溺れるのではなく、ちゃんと最終的には、人間はいつか老い、美は永遠でないことを受け入れなければならないという結論に至った考えが集約されたものがこの小説です。

そんなマンをいろいろ調べていくと、行き当たる日本人が三島由紀夫です。彼は若かりし頃、マンの作品を愛読していました。にもかかわらず、自分の小説「憂国」さらには監督・主演を務めた映画「憂国」で、見事に老いを受け入れられず、“美”というものにあまりにもこだわり抜いた作品を作り上げているのです。映画を見た時の衝撃もかなりのものでしたが、その後三島由紀夫が若い頃にマンを愛読していたことをある文献で知った時は、更に衝撃が走りました。どのような思考を経て、憂国に至るまでの最終的な価値観にたどり着いたのだろうか？そんなことに思いを馳せ、何かヒントがないだろうかと文献や小説を読んで想像を膨らませるのでした。

ここに挙げた名前の人全てが世界的に有名で自分には雲の上の存在なのですが、このように、国も時代もこえて繋がっていく文化や芸術の発見をするにつけ、私の中で何とも言えない心の底からのじんわりとした喜びや興奮が湧きあがり、この文化数珠つなぎがやめられなくなってしまったのです。

三つ目に、小説・映画のモデルとなったマーラーのことにも踏み込んでいきたいのですが、きりがなくなってくるので、今回はこの辺で終わりにしたいと思います。

このような感じで、夜ごと一人の部屋でアルコール度数の強いお酒をちびりちびりとやりながら、調べたことをもとに想像しては、ニヤニヤして過ごすのでした。

これを書いていて改めてわかりました。いつまでたっても独り身の理由が・・・

次は、ニコニコ鳴海管理者、杉山さんに繋がります。

低料第三種郵便物承認

平成 年 月 日発行（増刊）

A J Uニコニコハウス通信（第 292 号）（ ）